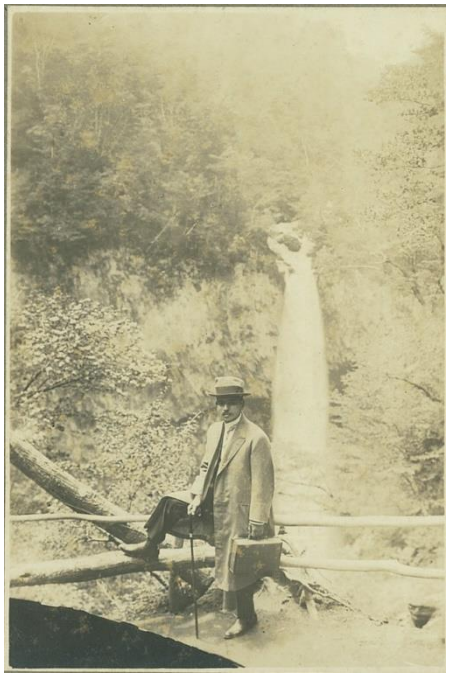
【道徳の窓】

ふるさと幸手に俳句の文化を広めた中野三允に学ぶ

ふるさと幸手だけでなく、全国に俳句を広めようとしていた中野三允とはどのような人物なのでしょう。三允の俳句を詠んで、それぞれの景色を思い浮かべながら鑑賞してみましょう。



［華厳の滝を背景にした中野三允］
［肖像写真］（大正 12 年、44 歳）

【俳句と出会い、俳句を広める】

三允は今から、約百五十年前の明治十二年に、幸手市で代々薬屋を経営していた家に生まれました。当時の幸手は東京から日光や東北地方への街道として人々の行き来が多い町で、東京での出来事が身近に感じられる町でした。三允の父も祖父も俳句に親しむ家庭で、幼いころから、三允は、各地の新しい文化や出来事に接する機会の多い生活をおくりました。

そんな三允は東京で学ぶ事をこころざして、東京の早稲田大学に進学して、薬剤師の免許を取りました。大学で俳句に興味をもち正岡子規と出会いその弟子として俳句を学びました。俳句は五・七・五の十七音と春夏秋冬を表す〈季語〉と言う言葉で身の回りの景色から感じたことを表現する文芸です。この俳句を新しい明治の世の中に広めようとしました。そして、小説家の尾崎紅葉などと早稲田大学に『早稲田俳句会』を作りました。その後、埼玉県にも俳句の文化を広めようとして、行田や川口などの俳句仲間と協力して、埼玉県で初めての

『アラレ』と言う俳句誌を作りその責任者となりました。

［中野三允和服姿］［肖像写真］
（昭和６年、52歳）

【俳句を日本全国へ】

そのころ、同じく正岡子規の弟子であった高浜虚子が『ホトトギス』と言う俳句雑誌を作り、全国に俳句を広めようとしていました。その運動に三允も加わり、全国から集まる俳句を選ぶ責任者として、俳句を日本全国に広める先頭に立ちました。

その一方、薬剤師としても、全国の薬剤団体の役員や、罪を犯した人が、立派に立ち直り活躍できるよう支援する保護司等の仕事にも取り組みました。

【ふるさと幸手に俳句の文化を広めたい】

昭和二十年に太平洋戦争が終わりましたが人々の心は戦争で疲れ、毎日の食べ物にも大変な時代がしばらく続きました。そんな中、三允は「俳句を通して、戦争で失った平和で穏やかな暮らしを早く取り戻し、幸手の人々の心を少しでも明るくしたい。未来へ希望をもてるようにしたい。俳句は鉛筆と紙と辞書があればいつでも、誰でも、どこでも、作れて心を豊かに出来る文芸なのです。」との強い思いをもち、町の公民館での指導を始めました。

三允は初めて俳句を学ぶ人にも分かり易い言葉でそれぞれの人の個性を大事にした俳句講座や俳句会を通して、お隣の五霞、久喜等の町の人々にも呼びかけ、俳句を広める活動をボランテアで続けました。

【今も引き継がれる三允の思い】

三允が幸手に俳句を広める種をまいてから七十年余りが経ちました。幸手市の権現堂堤で毎年開催される〈桜祭り〉では俳句コンクールが開かれ、故郷幸手を詠んだ優秀な俳句には「三允賞」が贈呈される等、三允がまいた種とふるさと幸手を愛する思いは、幸手の新しい伝統として今も引き継がれています。

［幸手町別荘での中野三允］［肖像写真］(明治 41 年、三允 29 歳))

【やさしく分かりやすい三允の俳句】

身の回りの様子をやさしく、分かりやすい言葉でつくられた俳句です。様子を思い浮かべて鑑賞してください。

○故郷幸手での身近な出来事を詠んだ作品とその意味

雛の間の障子あくれば筑波山

お雛様を飾っている部屋の障子をあけると東の空に筑波山が見えた。山も子の成長を祝っているようだ。季語〈雛〉季節〈春〉

故郷のつくつく法師声なじみ

高浜虚子と自宅で俳句会をしていたらつくつく法師が鳴いていた。懐かしい故郷の鳴き声がした。季語〈つくつく法師〉季節〈秋〉

霧晴れ来権現堂巡礼碑

霧が晴れてきて、権現堂堤の巡礼碑に来た。権現堤を大水から守った巡礼の親子の願いが今も生きているのかもしれない。季語〈霧〉季節〈秋〉

梅落ちて今日の守部の忌歌欲しや

江戸時代に橘守部と言う立派な学者が幸手で、多くの弟子を育てた。その人を讃える和歌が是非欲しいものだ。(幸手桜高校の北側に、守部が住んだ場所の看板があります。) 季語〈梅〉季節〈春〉

故郷の駅の広場の踊りの輪

昭和四年に幸手駅が出来た。町のみんなが、駅が出来て駅前広場で町が栄えることをお祝いしている。季語〈踊り〉季節〈秋〉

○子ども生活の様子を詠んだ作品とその意味

宿題が解けず柿食う兄に聞く

宿題を考えてもなかなか分からない。柿を食べているお兄さん「これ教えて」と聞いてみたら、答えが分かった。季語〈柿〉季節〈秋〉

子は顔を水にうつして目高釣り

目高つりをしている子は水の上すれすれに顔を近づけて、必死に水の中の目高を見逃さないようにしている。季語〈目高〉季節〈夏〉

ストローの終わりの音やソーダ―水

ストローでソーダ水を飲んだ。甘くておいしいのでストローがずるずるするまで一気に飲んでしまった。季語〈ソーダ―水〉季節〈夏〉

凧あげてかけあがりたる堤かな

凧上げに権現堂堤に行った。風に向かって、堤を駆け上がったら、堤の上の風に乗って凧が大空へあがった。季語〈冬〉季節〈冬〉

草餅の写生の絵の具草の色

子が草餅の写生をしている。絵の具をよく見ると、本当の草のように色を混ぜて工夫していた。食べたくなるようだ。季語〈草餅〉季節〈春〉

書初めに置く神童の手形かな

書初めをしている。子がいたずらで手に墨を付けて手形を押した。その手形を横に置いて字を書いている。季語〈書初め〉季節〈新年〉

［講演中の中野三允］［肖像写真］（明治 33 年、三允 21 歳頃）